



九条の樹

東久留米「九条の会」ニュース 第36号
2011年10月発行・東久留米「九条の会」
代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel.042-473-9489

日本国憲法9条を守り、活かす 東久留米「九条の会」

保育9条の会4周年

—いのちについて

真剣に向き合うとき—

保育9条の会 佐々木洋子

今年、5月28日(日曜日) 保育9条の会発足4周年を迎えて、商工会館に約90名の親子が集いました。あの3月11日の東北地方で起こった大震災。そこでうけた甚大な被害を自分の目で見てきた保育士達の話から始まりました。

自分が卒園した宮古の保育園。車のナビには保育園が記されているのに、そこにあつたのは小さな子供用の便器がひとつだけ。故郷の丘(石巻日和山公園)から見えた物は、がれきと化した町。避難所での生活が続いた姪達の話等々。4周年の参加券の売上金で被災地へ絵本や紙芝居を送り届け、今も被災地の保育園の子どもたちへとおもちやづくりを続けています。

8月6日から3日間群馬の前橋を中心に行われた全国保育合同研究会のオープニングフォーラムでの

事でした。岩手・宮城・福島 of 保育園の園長先生達が、避難したときの様子を時々声をつまらせながら話されたのです。紙面や映像からは知ることの出来ない想像を絶する言葉の数々。子どもたちの命を守り抜くという強い信念。故郷に住み続けたい。今まさにそのことを模索しながら前を見据える人達。しかし、壊れてもいない我が家を後にしなければならなかった人々がいました。いまなお壊滅的な被害をうけた原発による放射能に怯えながら生活している人達です。

—福島県福島市にあるさくら保育園の先生の話—

モニタリングで結果が出て、外にでて遊ぶことが出来なくなりまして。少しの時間外に出たときに転んでしまった子がいました。その子はすぐに、地面についてしまった膝と手を払ったとのこと。園庭で安心して転ぶことも出来ないのです。ここにいることが、子どもたちを大事にしていることなのかと父母達も悩みました。

今も、子どもも父母も保育士も傷

ついています。不安でいっぱい。「原発はいらない。子どもたちに土と太陽と空気を返して」と福島 of 保育士達が壇上から訴えたのが心に残りました。

8月は殆どの保育園で平和について考え子どもたちに話をします。私の保育園でも平和のつどいを毎年計画しやってきました。

今年はヒロシマに原子爆弾が落とされたときの写真と、大震災後の石巻の写真が大きく引き延ばしたものを並べて展示し見せました。自然が作り出す災害と人間が作り出す人災と。自然は人間の手ではどうしようもないけれど、原子爆弾は人間が作らなければすむ物。二枚の写真は、瓦礫と化してしまった所は同じ。でもそこには大きな違いがあることを知ってほしかった。

安全、安全といわれて作り続けてきた原発。いまこれだけ多くの人が故郷を追われ、いつ帰れるという見通しもなく、当たり前だった生活も取り戻せないでいます。今一度、いのちについて真剣に向き合うときなのではないでしょうか。



9・19「さよなら原発集会」に6万人

「脱原発」を訴える集会が、19日、東京・明治公園で開かれ、ノーベル賞作家の大江健三郎さんら文化人やジャーナリストも参加して、原発の廃止などを呼びかけました。

集会には主催者側の発表でおよそ6万人が集まり、呼びかけ人となったノーベル賞作家の大江健三郎さんや、経済評論家の内橋克人さんが壇上に立ちました。大江さんは「原子力によるエネルギーは必ず、荒廃と犠牲を伴う。私たちはそれに抵抗する意志を持っていることを、

政党の幹部や経団連に、デモで思い知らさねばならない」と呼びかけました。また、作家の落合恵子さんは「容易に核兵器に変わり得るものを持つ事は、恒久的の平和を約束した憲法を持つ国に生きる私たちは、決して許容してはいけない」などと訴えました。

東久留米からも数十名参加していました。

このあと、参加者は3つのルートに分かれて都内をデモ行進し、脱原発や、子どもを放射線から守ることを呼びかけるプラカードなどを手に、原発の廃止を呼びかけていました。



最後に登壇した、武藤類子さん（ハイロアクシヨン福島原発40周年実行委員会）の発言要旨をご紹介します。

皆さん、こんにちは。福島からまいりました。きょうは福島県内から、また避難先から、何台もバスを連ねて、たくさん仲間と一緒に、やってまいりました。初めて集会やデモに参加する人も、たくさんいます。それでも福島原発で起きた悲しみを伝えよう、私たちこそが「原発いらぬい」の声をあげようと、声を掛けあい、誘いあってやってきました。

最初に申し上げたいことがあります。三・一一からの大変な毎日を、命を守るために、あらゆることに取り組んできた皆さん一人一人を、深く尊敬いたします。それから、福島県民に温かい手を差し伸べ、つなが

り、様々な支援をしてください。ありがとうございました。そして、この事故によって、大きな荷物を背負わせることになってしまった、子どもたち、若い人たちに、このような現実を作ってしまった世代として、心から謝りたいと思います。本当にごめんなさい。

さて、皆さん。福島はとても美しいところです。東に紺碧の太平洋を望む浜通り。モモ・梨・リンゴと果物の宝庫の中通り。猪苗代湖と磐梯山の周りに黄金色の稲穂が垂れる会津平野。その向こうを、深い山々が縁取っています。山は青く、水は清らかな、私たちの故郷です。三・一一原発事故を境に、その風景に、目には見えない放射能が降り注ぎ、私たちは被ばく者となりました。大混乱の中で、私たちには様々な



ことが起こりました。すばやく張り巡らされた安全キャンペーンと不安の狭間で、引き裂かれていく人と人とのつながり。地域で、職場で、学校で、家庭の中で、どれだけの人が悩み、悲しんだことでしょうか。

毎日、毎日、否応なく迫られる決断。逃げる、逃げない。食べる、食べない。子どもにマスクをさせる、させない。洗濯物を外に干す、干さない。畑を耕す、耕さない。何かにも申す、黙る。様ざまな苦渋の選択がありました。そしていま、半年という月日の中で、次第に鮮明になっ

てきたことは、事実には隠されるのだ、国は国民を守らないのだ、事故は未だに終わらないのだ、福島県民は核の実験材料にされるのだ、莫大な放射能のゴミは残るのだ、大きな犠牲の上になお原発を推進しようとする勢力があるのだ、私たちは捨てられたのだ……。私たちは疲れと、やりきれない悲しみに、深いため息をつきます。でも口をついてくる言葉は、私たちが馬鹿にするな、私たちの命を奪うな——です。福島県民はいま、怒りと悲しみの中から、静かに立ち上がっています。子どもたちを守ろうと、母親が、

父親が、おじいちゃんが、おばあちゃんが。自分たちの未来を奪われまいと若い世代が。大量の被爆に晒されながら事故処理に携わる原発従事者を助けようと、労働者たちが。土地を汚された絶望の中から、農民が。放射能による新たな差別と分断を生むまいと、障がいを持った人々が。一人一人の市民が、国と東電の責任を問い続けています。そして、原発はもういらないと、声を上げています。

私たちは静かに怒りを燃やす、東北の鬼です。私たち福島県民は、故郷を離れる者も、福島島の土地に留まり生きる者も、苦悩と責任と希望を分かち合い、支え合って生きていこうと思っています。私たちとつながってください。私たちが起こしているアクションに、注目してください。政府交渉、疎開、裁判、避難、保養、除染、測定、原発と放射能についての学び。そしてどこにでも出かけて、福島を語ります。きょうは、遠くニューヨークでスピーチをして

いる仲間もいます。思いつく限りの、あらゆることに取り組んでいます。私たちを助けてください。どうか福島を忘れないてください。

私たちは誰でも、変わる勇氣を持っていきます。奪われてきた自信を取り戻しましょう。原発をなお進めようとする力が垂直にそびえる壁ならば、限りなく横に広がりつながら続けていくことが、私たちの力です。たたいま、隣にいる人と、そっと手をつないでみてください。見詰め合い、お互いの辛さを聞きあいましょう。涙と怒りを許しあいましょう。今つないでいる、その手の温もりを、日本中に、世界中に広げていきましょう。私たち一人一人の、背負っていかなければならぬ荷物、途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目をそらさずに支えあい、軽やかに、朗らかに、生き延びていきましょ。ありがとうございます。



◆お知らせ◆
シリーズ

原発を考える

《第1回》

○福島からの報告

○放射能汚染の人体への影響

11月5日(土)

午後2時〜4時30分

中央町地区センター会議室

参加費：1000円(資料代)

講師

真木實彦氏(福島大学名誉教授・

福島県9条の会事務局長)

塩田俊朗氏(帝京大学名誉教授)

福島県9条の会から事務局長の真木実彦(まさきさねひこ)さんをお招きして、現地状況を報告していただきます。また、塩田氏は、「放射能汚染は人体にどのような影響を与えるか」について講演します。

※「原発」問題は広くて深いので4テーマぐらいに分けて連続的に学習会を積み重ね、原発ゼロへの世論を広げていこうということになりました。シリーズで開催しますので、みなさん一緒に理解を深めていきましょ。

■劇団希望舞台東久留米公演

釈迦内棺唄

『釈迦内棺唄』(原作水上勉)

花岡鉦山が近くにあった釈迦内という在所が舞台になっていきます。その地で代々つづいた死体焼き場の家業を継いだ末娘藤子の物語。

水上勉さんは、死体の穴掘りと棺や塔婆を作る仕事をする父を持ち、十一歳で仏門に入った経験から、仏教や葬式の世界での差別をその目で見てこの作品が書かれています。舞台に釈迦内を選んだことについて、「日本でも最も人間を差別した事件のあった土地が選ばなければならなかった。私は花岡事件をう



かべた。花岡が浮かんだ時、『釈迦内棺唄』という題名ができた」と著書に書かれています。

職業差別、障害者差別、民族差別など、人間の幸福を奪い取る「差別」について訴える一方、家族の深い絆と愛情、わけへだてない人間に対する優しさが心の中に広がる作品です。ぜひ、たくさんの方に観て頂き、一人ひとりの心をつなぎ合う場になりたいと思います。

「釈迦内棺唄」をみる会
嶋さな江

■西部九条の会 戦跡めぐり②

東久留米市周辺の戦跡
日時：11月19日(土)

午前10時〜午後3時

参加費：2000円

申込み先：大山 042-478-3266

大野 042-475-9359

申込み締め切り10月31日(月)

海軍大和田通信所(新座市) ↓
浄牧院・モニュメント(大門町)
↓中島航空金属引込み線・橋台・
軌道の跡↓自由学園・慰霊碑

《平和を考える本》

『天才フレディ』と幽霊の旅

シド・フライシュマン・作

(徳間書店)



第二次世界大戦後、腹話術師としてヨーロッパをまわっていたフレディは、ある晩、幽霊と出会った。幽霊は、ナチスに殺されたユダヤ人の少年で、この世に残したことがあるので出てきたのだという。演技の下手なフレディの舞台を手伝って、あちこち旅をしながら、幽霊の少年は、自分と妹を殺したナチスの将校をやっと見つける。

法廷で嘘八百を並べたて、まだ罪を逃れようとあがく将校に自白させるため、幽霊の少年の使った奇想天外な方法とは、さて!? 会話のおもしろさの中に、平和への願いがこめられたおシャレな作品。(高田桂子)